

創造につながる小学校音楽教育への展望

—学校の音楽教育にコミュニケーション力を重視して—

Prospects for music education that lead to creation.
—Respecting for communication in music class at elementary school—

竹 内 真 紀
TAKEUCHI Maki

[Abstract] Ministry of education emphasized the importance of the development of abilities related to music in life and society. It regards if children enjoy music spontaneously, their life will be wealthy, so encourages the school to give the music lessons reflecting the government's opinion. And the government also notifies the school of the next three points.

- 1) Acquisition of “knowledge and skills.”
- 2) Development of “thinking ability, judgment, and expression.”
- 3) Cultivating “learning power and personal power.”

Firstly, children need “knowledge and skills” to express the music. Secondly “thinking ability, judgment, and expression” helps children to make clear what they would like to communicate and to build up the way to express. Thirdly, “learning power and personal power” step their expression to the new stage. It is expected that the music class in elementary school makes children sociable and cooperative.

I've had a teacher training class while considering the correlation between performance techniques and musical expressions. Students have improved some ability, for example reading music quickly, understanding music in a compositional way. On the other hand, their music sound completely different from “Art music”, and their music expression has no purpose and no development. I've paid too much attention to developing technical skills in my class, so it caused a lack of communication and camaraderie. We must have respect for more “communication” in music education. I would like to consider a music lesson structure from communicative and creative point of view.

1. はじめに

(1) 研究の背景

平成 29 年に告示された小学校学習指導要領音楽科では、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力の育成を重視している。児童が音や音楽との関わりを自ら築いて生活を豊かにしていくことが、音楽科の役割として期待されている。その為に、育むべき資質・能力の目標として、学習指導要領では

- ①「知識及び技能」の修得
- ②「思考力、判断力、表現力等」の育成
- ③「学びに向かう力、人間性等」の涵養

を掲げている。つまり、①表現するために知識や技能が必要であり、②思考力、判断力によって伝えたい事を明確化し、より良き表現方法を考える。そして、表現を発展させながら③新しいステージに掘り下げ、学びや成長につなげられるかということである。そこには、社会性を伸ばし、他者と協力できるような人間を育てる意図も含まれるであろう。

筆者は、教員養成の音楽授業において、演奏技術と音楽表現の相互性を図りながら、表現力を重視した授業を進めてきた。その結果、読譜の正確性が増したことや、全体像から音楽の流れを読む力が向上した、など、良くなった点もある。その一方、芸術（音楽）の側面からかけ離れる感覚があった。皆で演奏しているにもかかわらず、ひとつの音楽としてまとまりがなく、また喜怒哀楽の表現にも乏しいからである。授業で聴こえてくる音からは表現の行き先がなく、発展性を感じられなかった。原因として、これまでの授業に個々の技術力向上への偏重の傾向があったことは否めず、その結果が集団の意識やコミュニケーションの欠如を招いたと考えられる。音楽はひとりで完結するものではない。他者との対話やコミュニケーションを前提とした音楽授業が必要ではないだろうか。

(2) 先行研究の検討

授業におけるコミュニケーション能力や対話を題材にした先行研究は、授業の実践から分析したものが多い。

金城・小川・岡田(2016)は、鑑賞の授業の中で、対話を通して音楽理解を深める協調学習の在り方を説いている。テーマについてグループで話し合い、皆でそれらを共有する。コミュニケーションの中で新たな問いが生まれることで対話はさらに活性化し、生徒自身が知識間のつながりを見出し、個々の音楽理解の深まりを狙うというものである。

言葉に注目した研究は、山口・西田・立岡(2017)と山中(2019)の2つのものが挙げられる。山口たちは、言語活動の充実という視点で歌唱の授業を見直し、“わざ言葉”の有効性を説いている。“わざ言葉”とは、感覚の共有を促す言葉である。児童が音楽に出あう時に持つ①「音楽に対する感覚」と、その思いを音にするために必要な②「表現時の身体感覚」を、児童・教師間で深く共有する為のコミュニケーションの手段として、この言葉に注目している。“わざ言葉”を用いて対話を重ねることで、より明確な共有が可能になり、歌唱の音楽表現が向上することを導き出している。

山中(2019)は、器楽演奏において表現の技術向上を目指す際、教師の多角的な指導言語の在り方に注目している。児童に身体感覚や感情を複合的に想起させ、それを皆で共有出来ることが必要であり、そのために、“わざ言葉”を含む比喩表現と比喩的動作が効果的であることを説いている。

これらの先行研究は、小・中学生を対象とした授業を基にしたもので、「他者との分かち合い、対話」を軸に、学びの質の向上につなげていく道筋を示したものである。そこには 教員の的確な示唆が重要な役割を果たしていた。

本論文では、児童自らが能動的なコミュニケーション能力を向上させ、対話を発展させながら新しいものを創造していく力をつけることを重視する。その為の教員養成の授業構想を立てたい。

2. 分析と考察

(1) 分析の方法

音楽活動におけるコミュニケーション行為を、①準備、②対話、③発展という3つのプロセスに分け、先行研究や文献を柱に分析する。その後、筆者が担当する教員養成の音楽授業「音楽実技Ⅰ」の授業の内容に、コミュニケーションの意識をどう組み込んでいくのかを、現状の授業の様子をふり振り返りながら考察したい。

(2) 分析

先述した3つのプロセスを充実させるために、それぞれどのような能力が求められているかを、以下のように考え、分析を進めたい。

- ①準備とは、「音楽と向き合い、自己表現する能力」
- ②対話とは、「自分の音楽表現を他者と分かち合う能力」
- ③発展とは、「対話をより深め、新しいものを創造していく能力」

①は、“自己と音楽”であり、②と③は“集団での音楽”である。学生を取り巻くこれらの環境の違いを意識しながら、3つのプロセスの分析を行った結果を筆者がまとめたものが【表1】である。

①音楽と向き合い、自己表現する能力

はじめに、“自己と音楽”について考えたい。①の能力について、①－a. 音楽から自分なりの価値を見出す、①－b. 自己表現する、という2つの段階に分けて分析する。

①－a. 音楽から自分なりの価値を見出す

本来音楽とは感情の表出であり、言葉にできない複雑な人間の精神性の結晶である。音楽表現は決して一方通行のものではない。実演であっても、鑑賞であっても、音楽作品が訴えるものに対して能動的な態度で向き合うべきである。ヒンデミットは、音楽と人との出会いについて「われわれは、ただ音楽を知覚するだけでは足りない。(中略) われわれ自身が何らかの方法でそれにはたらきかけねばならない。音楽から受けた印象を変形させて、われわれ自身の所有物として、意味あるものにする努力が必要である」と語っている(ヒンデミット、1955)。また、アインシュタインは、「直感やイメージは、言葉や符号に優先して現れる。」と述べている(桜林仁、1965)。音楽と出会うとき、印象を強く感じ取ること、つまり直感力が必要である。直感によって強く感じたものは、自分の経験や記憶と繋がり、自分なりのイメージや価値を見出す。これは個性と言える。

さらに、リードは、芸術作品との出会いについて「われわれが作品の中に美を感じるのは作品自体がもつフォームの美しさと、それによって呼び起こされる想像の、弁証法的な交互作用によるもの」と述べている(リード、1962)。音楽作品に対する直感力、想像力を膨らませられる力が、コミュニケーションの準備の段階として大切なものであり、読解力があればそれはさらに掘り下げることが出来る。

①ーb. 自己表現する

「人間は生まれながらにして自己表現意欲を持っているものである。芸術とはまさに自己表現であり、伝えかけにほかならない。」(木村信之、1968)。自分なりの価値や個性を、相手に伝えたいというのが、人間の本能であり、伝えるための術が技能である。音楽表現でいう技能とは、感覚や知覚に身体動作が供応し、音に変換することである。音楽の技能は、歌唱や器楽演奏、創作など様々なものがあり、これらはくり返しの練習によって習得されるという側面があるが、技能の習得自体が目的なのではない。音楽表現の為に、技能を組み合わせる力が必要なのである。また、その表現は自分の個性を反映した、自分の表現でなくてはならない。それが先述したヒンデミットの言葉「音楽から受けた印象を変形させて、われわれ自身の所有物として、意味あるものにする努力」なのである。

②自分の音楽表現を他者と分かち合う能力

①の“自己と音楽”を経て、ここからは“集団での音楽”について考えたい。②の能力について、②ーa. 集団の中での自己表現 と、②ーb. 表現を分かち合う という2つの段階に分けて分析する。

②ーa. 集団の中での自己表現

中村は、集団と感情について興味深い考えを記している。「感情は、個人的なものであるよりもむしろ集団的なものであり、個々の感情はただそれだけで自立しているのではなく、その人の属する集団によって支えられ、条件づけ、方向づけられている。」(中村、1997)。また、長島によると、「集団が永続的に安定したものであればあるほど、そこでの感情は洗練される。」(長島、2004)。つまり、集団の中での個人の立ち位置によって人の感情は左右され、集団そのものの環境によって、人々の感情の質も変わってくるということである。

音楽活動に先立ち、集団そのものの雰囲気づくりは重要であると考え。肯定的な態度や温かな関係性を大事にし、精神的に解放されている状態で、はじめて自由で豊かな自己表現が生まれる。

②ーb. 表現を分かち合う

「芸術は自己表現であり、また“伝えかけ”にほかならない。」(木村、1968)。「自己表現を”伝えかけ”することは、伝えることが目的なのではなく、その表現は誰かに向いており、感情を持つ生きたものであるはずだ。

音楽の授業では、この生きた自己表現が相手にどう伝わり、どのような反応が返ってくるのか、という感情の共有・表現の交換こそが醍醐味である。その為に、仲間とどのような分かち合いができるかを前提にした表現が大事で、相手の音から気持ちや心の内を読み、聴きとること、調和を重んじる努力が必要である。

③対話をより深め、新しいものを創造していく能力

③は、コミュニケーションを基に新しいものを創造していく能力である。ここで、③ーa. 対話を深める、と、そこから新たに③ーb. 創造していく、という2つの段階に分けて分析する。

③－a. 対話を深める

対話とは、状況全体の動きに応じて常に変化を伴う、動的なものである。音楽において動的な対話とは、表現がひとつのところにとどまらず、相乗効果で常に新しいものが創られていくことであろう。ここで、もうひとつの対話の側面である自己との対話に触れたい。他者の表現によって、自分の中でこれまでになかった新たな視点や考え、感情が生まれる。このように他者との相互作用による自己のアップデートが繰り返されれば、自分の解釈や理解も深くなる。そして新しい返しが出来るようになると、対話に発展性が出てくる。この為には他者からの表現を自分の中で受け止め、理解・解釈し自分の思考で発展させて返す力が必要である。

③－b. 創造していく

発展性ある音楽的な対話を経て、これまでになかった新しい視点や考え方で、他者と共に音楽や表現をつくれるか、という創造の能力について考えたい。創造には、まずアイデアを起こす発想力と、つくろうとするものをイメージする想像力が必要である。ここで、集団の力で良いアイデアを考え出すブレインストーミングに触れたい。考案者であるオズボーンが成人に行ったテストによると、グループによる自由な連想は、ひとりでアイデアを練る場合に比べ、65%から93%多くの連想を可能にしたという実験結果となった(オズボーン、1971)。集団の作用によって、想像力や発想力が大きくふくらむということの証明である。

個人レッスンとは異なり、音楽の授業は他者との関わりがある。授業の中には、それぞれに違う声や器楽音、リズムの振動などが共存する。集団においてアイデアが連想していくように、音楽行為においても、より多くの感情が連鎖していくほど、発想力が感化・触発され、そこから想像力が広がっていく。そして新しい音楽をつくっていくきっかけとなる。共に創造しようとする仲間(他者)に興味を持ち、呼吸を合わせることで、一緒に表現し、音楽を創造することが出来る。

【表1】：音楽活動におけるコミュニケーション行為の分析

プロセス	環境	能力	段階	分析 意味	必要なもの	
					技術的・身体的	心理的・意識的
準備	自己と音楽	①音楽と向き合い、自己表現する能力	①－a. 音楽から自分なりの価値を見出す	・ 音楽作品の知覚 ・ 想像力を膨らませること	読解力	直感力 個性 想像力
			①－b. 自己表現する	・ 技能を組み合わせる音楽表現を完成させること ・ 自分の個性の表現	演奏技能	自己表現意欲 個性表現意欲
対話	集団と音楽	②自分の音楽表現を他者と分かち合う能力	②－a. 集団の中での自己表現	・ 集団と感情の関係 ・ 精神的に解放された心理状態	身体動作	肯定的な態度 温かな関係性 心理的安全性
			②－b. 表現を分かち合う	・ 感情の共有 ・ 表現の交換	音を聴く	表現の奥の心情を聴く 調和
発展		③対話をより深め、新しいものを創造していく能力	③－a. 対話を深める	・ 対話による相乗効果 ・ 自己との対話	理解 解釈	解釈し、自分の思考で返す力
			③－b. 創造していく	・ 新しい視点を見つけ、一緒に創造すること	呼吸	発想力 想像力 連想

(3) 考察

これまで、音楽活動におけるコミュニケーション行為の3つのプロセス①準備、②対話、③発展、を充実させるため、それぞれどのような能力が必要であるかを分析してきた。コミュニケーション能力を培いながら、創造的な音楽教育を目指す為には、技術的・身体的な観点よりも、心理的・意識的な観点からの改善が必要である。このことは、これまでの授業の在り方が技術の習得に比重を置きすぎた点を反映しているとも言える。この結果を、今後の授業に活かすべく考察する。

最初に、授業を想定した際に、分析結果がどのような音楽行為に直結するのかを具体的に記す。そして、それらを充実させるために授業に取り入れるべきことを、現状の授業の様子をふり振り返りながら考察する。

まず、「準備：音楽と向き合い、自己表現する能力」とは、音楽と出会う前の心構えから、音を出すまでの行為である。それらの行為を次のように考える。

- ①楽譜から音やイメージを鮮明に思い起こす【直感力】
- ②思い起こした音を自分で深く考え、想像を膨らませる【想像力】
- ③伝わる演奏技術をもつ【自己表現・演奏技術】

次に、「対話：自分の音楽表現を他者と分かち合う能力」とは、相手を意識し、音や場の雰囲気から相手の意志や気持ちを汲み、受け入れて共有し、自らも伝えることである。それらの行為を次のように考える。

- ④学生が自信をもって表現出来る雰囲気を作る【肯定的な態度】
- ⑤感情を共有する【調和】
- ⑥表現を交換する【つながりたいという気持ち】

そして、「発展：対話をより深め、新しいものを創造していく能力」とは、対話を発展させ、意志や気持ちを交換し続けることである。相手の表現を受け止め、解釈し、そこで起こる自分の変化と向き合えば、新しいものを創造することが期待される。それらの行為を次のように考える。

- ⑦相手の表現を受け止め、自己に還元する【解釈】
- ⑧より多くの表現やアイデアに興味を持つ【連想】
- ⑨共に創る【創造】

ここから考察を始める。考察を筆者がまとめたものが【表2】である。

- ①「楽譜から音やイメージを鮮明に思い起こす」【直感力】
- ②「思い起こした音を自分で深く考え、想像を膨らませる」【想像力】

筆者は、授業で毎回必ず新しい楽譜に触れることを続けている。それは、予見時間で音楽の全体の把握や流れを意識する為、またスムーズな演奏に向けた読譜の為に行っている。繰り返した結果、楽譜を早く正確に読めるようになり、演奏のぎこちなさは消えてきたように思う。しかし、現実には間違えずに音を読むことに必死な姿が観察され、表現の行き先がなく、発展性がな

い。音名や音価を読むことが目的ではなく、音楽の中にある情景、情感にまで入り込もうとする力を身につけ、そこから自分が思うことや感じることは何なのか、という段階まで導くべきと考える。

授業の視唱では、クラシックの名曲や民族音楽の編曲を中心に選曲している。オペラアリアや交響曲や歌曲など、さまざまな形態の曲の編曲が課題となるが、それらが学生のイメージで歌われた後に、オリジナルの演奏を鑑賞し、その曲が誕生した国、時代、文化などのバックグラウンドなどにも触れていく。音楽作品に関する様々な形の知識の蓄えは、音楽に対するイメージ向上にもつながると考える。また、民族音楽なら踊りのリズムやステップなど、身体を使って体感することも有効であると考え。学生たちが表現するものに対する多角的なアプローチは、本人の中でイメージを沸き起こす引き金になるのではないかと考える。その読譜が正しい、正しくない、ではなく、感性に訴え、体感できる形で包み込むケアを繰り返すことが、音楽を感じる力につながることを期待する。

③「伝わる演奏技術」【自己表現・演奏技術】

これまでの筆者の授業から聴こえてくる音からは、表現の行き先や発展性が感じられなかった点については前述のとおりである。楽譜とにらみ合いながら情報を音に直結させる訓練は、閉ざされた表現の原因となり、目的を失ってしまう。音楽授業にとって大切な目的は、“訓練”ではなく“伝える”ことであることを再認識した。そこで、表現を交換する音楽、アンサンブルが有効であると考え。筆者は、前回の研究でもアンサンブルの必要性を説いたが、それは自分の音と相手の音の意識的な聴きかたを目的としたものであった。今回の研究では、特に音の聴き方を細分化し、目的に合わせた3種類のアンサンブルを提案する。③「伝わる演奏技術」を磨く為には、小規模な重奏を行いたい。授業の中でアンサンブルを行う場合、多くの音に埋もれることなく純粹に自分の音を演奏したり聴いたりする機会は、あまりないことに思う。その中でも相手との音楽的会話もある小さな2重奏や3重奏は、自分の音を把握し、かつ相手に伝える技術を養うために効果的であると確信する。相手の音からも、自分の意志が伝わったのか、コミュニケーションが成立しているかを知ることが出来る。

④「自信をもって表現が出来る雰囲気づくり」【肯定的な態度】

学生は皆、表現することが好きである。ただ、表現することにためらいや恥じらいがあり、完全には心理的に開放されていないのを感じる。集団と音楽を考えるにあたり、土台となる雰囲気作りは非常に重要であるはずだ。学生の発言・表現欲を、教員がタイミング良く取り上げ、全体に共有することで場が和むことが多々ある。教員が常に優しさを持ち、肯定的な態度で場をほぐし、皆が前向きに表現・発言出来るような心理的安全性を確保することも、留意すべきである。教員が学生個々に対してきめ細やかに歩み寄り、包み込むこと、また学生と同じく演奏に加わり同じ視線でひとつの音楽をつくること、などを心がけたい。一方的に教員が学生に対して話をするという構図になりがちな授業形態を、よりフラットでオープンなものにつくり替える意識を持つことが大事であると考え。

⑤「感情の共有」【調和 気持ちを汲む】

⑥「表現の交換」【つながりたいという意志や気持ち】

コミュニケーションとは表現の交換で、感情の共有があれば、なお対話は円滑に進む。⑤「感情の共有」と⑥「表現の交換」の為に、ここでもアンサンブルを取り入れたいが、③「伝わる演奏技術」の重奏とは違い、合奏を行いたい。ここでは、皆でひとつの音楽をつくるということにフォーカスする。まず、パート旋律を皆で演奏したり斉唱したりする過程において、自分の表現が他者と馴染み、音楽の一部となっているかという点に留意した聴き方を指導する。つまり音を同時に鳴らすだけでなく、その中に調和を感じられるところまで、聴きこむ。次に、異なるパートを担当する仲間たちとも、同じ音楽をつくる立場同志、同じ感情と呼吸を共有できているかという点に意識を向けさせたい。その為に、すべてのパートの経験を積み、音楽の全体の感覚をもった上で、合奏する。

さらに、言葉についても触れたい。筆者は、前年の研究でも言葉の必要性に触れた。それは、音楽の印象や感想を言葉で表すことによって聴き方が明確になり、客観的に捉えることが出来るようになる為であった。しかし、ここでは、コミュニケーションの為に言葉を用いたい。他者とコミュニケーションを図りながら音楽表現をしていく上で、自分の意志を伝え、相手の気持ちを理解する事は不可欠である。音だけでなく、巧みに言葉を用いる努力も必要ではないだろうか。言葉にするためには、たくさんの過程がある。自分の意志を明確にし、相手を理解し、もし相違があれば、何を選択して理想に近づけていくのかを考えなくてはならない。そして、どのように問題を解決してひとつの音楽をつくっていくか、という“道筋”と、どのように言えば相手に伝わるか、という“伝え方”を考える必要がある。抽象的な音楽的表現や心情を、言葉でどう伝えるかは簡単なことではないが、先行研究で触れた感覚を促す“わざ言葉”をはじめ、比喩的な表現も、使い続ける事によって伝えることが巧みになる。イメージを言葉にする行為を繰り返すと、イメージ力そのものの向上にもつながると確信する。コミュニケーションの為に、有効な言葉の活用にも力を入れたい。

⑦「相手の表現を受け止め、自己に還元する」【解釈】

⑧「より多くの表現やアイディアに興味を持つ」【連想】

相手の表現に興味をもつ方法として、リレー創作を提案したい。拍子や調を設定し、あらかじめ皆が用意した1小節から2小節の短いモチーフやリズムフレーズを、休符や教員の伴奏を挟みながらつないでいくリレー創作である。皆でひとつの音楽をつなぐことは、相手の表現を意識的に聴くことにつながる。

このリレー創作は、即興にも応用が出来る。筆者の前回の研究で提案した即興は、音楽の様々な可能性を体感し、音楽体験を豊かにするためのものであったが、今回は“皆でひとつものを創る”という要素を大事にしたい。即興でつなぐリレー創作の場合、相手の表現を聴きながら即座に自分がつないでいく必要がある。その先をつくるには、前のフレーズのイメージをうまくつかんでスピーディーに自己に還元し、生み出すことが必要であり、このことが創作に大いに影響する。くり返し行うことで、フレーズやモチーフから素早くイメージを思い起こすこと、直感力・連想の力の強化にもつながると考える。

⑨「共に創る」【創造】

ここでは、ひとつの大規模なアンサンブル曲に、長い時間をかけて取り組むことを提案したい。楽譜との出会いに始まり、音取り、パート練習、合わせる、調整する、など、ここまで述べてきた全ての過程、「準備」「対話」「発展」がこの中に含まれる。例えば半年、ひたすら同じ曲に向き合い続ける。このことはとても有意義であると考え。パーツに分けて毎週取り組み、それらをどうつなげてまとめていくかを試行錯誤する中で、様々な問題が発生する。音や言葉など、たくさんの手段を用いながら自己表現や音楽的対話を行い、長い期間真摯にくり返し同じ音楽に向き合い続けることで、視点も深くなり、たくさんのアイデアや想像が得られる。コミュニケーションによって問題を解決しながら、大きなひとつの音楽をまとめる体験は、創造そのものである。

【表2】コミュニケーション能力向上の為の授業内容の考察

プロセス	環境	行為	育成するもの	取り入れたいもの	意図
準備	自己と音楽	①楽譜から音やイメージを鮮明に思い起こす	直感力	・演奏する曲の鑑賞 ・曲の背景や、作曲家、音楽史などの知識の蓄え	・学生の表現に対する多角的なアプローチ ・学生の感性に訴え、体感できる形のケア
		②思い起こした音を自分で深く考え、想像を膨らませる	想像力		
		③伝わる演奏技術をもつ	自己表現演奏技術	アンサンブル1 小規模な重奏	自分の音の把握と相手に伝える技術
対話	集団と音楽	④学生が自信をもって表現出来る雰囲気を作る	肯定的な態度	・表現しやすい雰囲気づくり ・授業形態をフラットでオープンにすること	心理的安全性の確保
		⑤感情を共有する	調和		
		⑥表現を交換する	つながりたいという気持ち	アンサンブル2 合奏	・皆でひとつの音楽をつくること ・感情と呼吸の共有 ・イメージを言葉で表すこと
発展	音楽	⑦相手の表現を受け止め、自己に還元する	解釈	リレー創作	・皆でひとつの音楽をつなぐこと ・相手の表現を意識的に聴くこと ・イメージ力や直感力の強化
		⑧より多くの表現やアイデアに興味を持つ	連想		
		⑨共に創る	創造	アンサンブル3 大規模なアンサンブル曲に長い時間をかけて取り組む	・長期的にひとつの音楽に向き合うこと ・問題解決しながら創造すること

(4) 結論

以上の考察から、次の結論を得た。

- 1) コミュニケーションのための雰囲気づくり【雰囲気】行為④
- 2) 音楽作品を知ること【鑑賞・講義】行為①②
- 3) アンサンブルの実践【合奏・演奏】行為③⑤⑥⑨
- 4) リレー演奏の実施【創作・演奏】行為⑦⑧

この結論から言えることは、雰囲気作りと授業の内容に関することである。

表現することに緊張やストレスを強いる環境からは、豊かな表現など生まれない。他者と交わりながら音楽をすることの楽しさは、快適な環境から始まるのであり、肯定的なまなざしで、平等で自由な雰囲気をつくることは大切である。その中で、自分の心を開き、人の心を理解しながら表現を楽しむ態度は、音楽に限らず、社会で生きていく上でも必要なものである。

授業の内容に関して、鑑賞・合奏・創作という音楽的アプローチをバランスよく行うことは、よりたくさんの感覚を使ってコミュニケーション・対話を体験することである。このことは、鑑賞で得たイメージづくりが演奏する際にも効果を生み、リレー演奏で呼吸を合わせる練習を重ねて得たものが、合奏でも生きてくる、など、全てにつながっていく。また、それぞれに集団の意識を加えることで、気持ちが連鎖・拡散し、出てくる表現の世界がより広がる。つまり仲間との深いコミュニケーションが、限りなく大きな創造につながると言える。

3. 今後の授業構想に向けて

児童自らが能動的なコミュニケーション能力を向上させ、対話を発展させながら新しいものを創造していく為の教員養成の授業構想について、考察してきた。教員に必要な音楽技術を、限りある時間の中で効率よく“訓練”することで、音楽の本質から離れ、表現がしにくい環境を作ってはいなかっただろうか。この研究はそこからスタートしたのであるが、音楽理論、ソルフェージュ、器楽、歌の授業を行う中で、やはり学生が一番生き生きと取り組むのは、器楽演奏や歌なのである。歌ったり楽器を演奏したりする音楽活動を、コミュニケーションをベースに考え直すと、ひとつの音を出し、聴き、一緒に演奏するというシンプルな工程毎に、如何にたくさんの感情や思考の交流があるかに気づく。その交流こそが、音楽にとっていちばん大切なことであると痛感した。

自分が出す音や表現について考えるだけでなく、相手の表現にも心を砕き、一緒に表現をたのしむという、音楽の本質を忘れてはいけない。作曲者も演奏者も、日々うつりゆく繊細で複雑な人間の感情をもった人間で、音楽は人間の感情そのものである。その本質に触れることで、人間を学び、協調性に触れ、共生のための術を知るのが音楽教育ではないだろうか。音楽を楽しむことを通して、柔軟に問題解決をしながら、あたらしいものを創造していく力を育む音楽教育を目指し、さらに研究を続けていきたい。

【引用・参考文献】

〈著書〉

- A.F. オズボーン (1971) 『独創力を伸ばせ』ダイヤモンド社
木村信之 (1968) 『創造性と音楽教育』音楽の友社
桜林仁 (1952) 『生活の芸術』誠信書房
中村 雄二郎 (1997) 『感性の覚醒』岩波書店
ヒンデミット (1955) 『作曲家の世界』音楽之友社
リード (1962) 『芸術による教育』美術出版社

〈論文〉

- 長島真人 (2004) 「音楽の真実を求める学びの共同体の形成をめざした音楽授業の構想：歌唱指導における音楽によるコミュニケーションの成立を視点として」『学校音楽教育研究』8(0)、pp.130-140
金城園美、小川由美、岡田恵美 (2016) 「『個』の音楽理解を深める授業づくり—協調学習による対話を通して—」『琉球大学教育学部附属中学校研究紀要』琉球大学 (28)、pp. 99-110
山口亮介、西田治、立岡昌史 (2017) 「小学校音楽科における『対話的な学び』の授業デザイン」『長崎大学教育学部 教育実践総合センター紀要』(16)、pp.190-199
山中和佳子 (2019) 「音楽表現の質の深まりを目指した小学校音楽科の器楽学習」『福岡教育大学紀要』(68)、pp. 1-8